

The background of the book cover is a stylized illustration. At the top, there are dark green, jagged mountain peaks. Below the mountains is a band of lighter green, representing a forest of coniferous trees. The middle section of the cover is a solid light grey, representing a body of water. On the right side, there are several tall, thin, white tree trunks with some sparse, light green foliage at the top. The bottom section of the cover is a solid dark green, representing a forest of deciduous trees.

平岩弓枝

湖 水 祭 下

文春文庫



文春文庫

湖 水 祭(下)

定価はカバーに
表示してあります

1987年 5 月10日 第1刷

1992年 4 月 5 日 第6刷

著 者 平 岩 弓 枝

発行者 豊 田 健 次

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町 3—23 〒102

T E L 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-716839-1

文春文庫

湖 水 祭

(下)

平岩弓枝



文藝春秋

湖水祭(下) 目次

彼岸	7
夜桜	28
夜の世界	48
湯の里	70
野心	91
南の島	113
惨殺	133
白い花	154
紛失	175

転生	197
深川	218
死出の旅	239
一つの命	260
チポリにて	280
白夜	301
湖水祭	321
解説・伊東昌輝	341

湖
水
祭
(下)

彼 岸

北欧はまだ冬の中であつたが、久しぶりに帰国した日本は、春爛漫であつた。

「日曜は混むから、兄さんの都合がよければ、土曜にお墓まいりに行きましょうよ」
真紀子にいわれて、兵庫はカレンダーを眺めた。

「そうか、お彼岸か」

「いやだわ。なんだと思つたの」

外国暮らしの習慣の中で、彼岸の墓参という感覚がすっかり薄くなつていた。

「土曜、いいよ。午後からなら、体があく」

オフィスは正午までであつた。

格別、予定も入っていない。

妹と根岸で待ち合せて、軽い食事を一緒にした。

「河田先生、ヨーロッパへいらしたのよ」

根岸には、河田要の自宅がある。昨年 of 初秋に、やはり妹と墓参に来て、根岸の町で河田要に会ったことを、兵庫は思い出した。

「ヨーロッパはどこ……」

「ロンドンからエジンバラ、グラスゴウまでいらして、帰りにスイスへお寄りになるんですって」

文芸雑誌に、シェクスピアに関する読み物を書いていて、その取材のためだと、真紀子はいった。

「六月に、うちの劇団がマクベスを上演するの。その打ち合せの席で、おっしゃったの」

「もう、出発されたのか」

「十日くらい前かしら」

すると、兵庫の帰国と入れちがいぐらいであった。

「スイスに寄られるのだと、左江夫人を見舞われるのかも知れないな」

古河左江はコペンハーゲンからスイスのジュネーブに移って、療養していた。どうも、容態が一つはつきりしないので、日本までの長旅を避け、親しい医師のいるジュネーブの病院へ替ったものである。

「雪江さんもついていらっしゃるんでしょう」

ちらと兄の顔色をみて、真紀子がいった。

「兄さん、寂しいでしょう」

「馬鹿だな。なんで、俺が……」

苦笑したが、凶星であった。

少し、近づいたかと思うと、すぐ遠くなってしまふ彼女とのつき合いが、じれったい。

それに、兵庫としては、佐伯啓介の死について、雪江と話したい気持もあった。

あのあと、兵庫は二度ほど、事情聴取を受けたが、どうやら、佐伯啓介の死は、行きずりの物盗りの仕業とされているようであった。

もっとも、それは表向きのこと、彼が北欧へやって来た目的については、おそらく、彼の家族から打ちあけられているだろうし、その方面からの捜査が内々で進められているのかもしれない。

兵庫にとっては痛くもない腹だから、いくら探られてもかまわないが、行きがかり上、どうも釈然としないのも事実であった。

大体、佐伯啓介が、なんのためにコペンハーゲンへやって来たのかからして、わからなかった。

彼の航空券は、往復ともモスクワ経由で、帰りの便の予約は、彼が殺された三日後、ヘルシンキ発のモスクワ行と、モスクワで別の航空会社に乗るかえて成田行と二枚の航空券が石川寛子によって確認され、席がリザーヴされていた。

石川寛子の話によると、それは彼がコペンハーゲンへ行く前日に、彼から依頼されて手続をとったという。

つまり、佐伯啓介は帰国日を決定したあとで、急にコペンハーゲンへやって来たものらしい。彼の性格からしても、北欧へ来たから、ついでにコペンハーゲンを観光したくなつてというようなものではないと兵庫は思う。

大きな理由は、古河左江の見舞であつた。

古河左江は古河健志の姉であつた。佐伯年雄と古河健志は友人である。

もしも、佐伯年雄の死に、古河健志の自殺が、なんらかの形でかわり合いがあるとしたら、佐伯啓介は、古河左江になにか訊ねたいことがあつたのかも知れなかつた。

少くとも、啓介は、兵庫が昨年の夏、ヘルシンキへ行ったのは、古河左江から健志の自殺について調査を頼まれたからであり、その折、接触したのが佐伯年雄だということを知っている。佐伯年雄の死因を調査している中に、ひょっとして啓介は、古河左江に会つて訊きたいことを発見したのかも知れなかつた。

それだと、彼が急にコペンハーゲンへやって来た理由がわかる。

そして、彼が、その訊きたいことを発見したのは、兵庫が左江の事故の連絡を受けてヘルシンキを出発したあとであり、更に、一日遅れてヘルシンキに到着した雪江が、そこで啓介から左江の事故を知らされて、コペンハーゲンへかけつけて行ったのよりもあとに違いなかつた。

その時点で、啓介が左江に訊きたいことを発見していたとすれば、兵庫か、或いは雪江に同行してコペンハーゲンへ来た筈であつた。外国語に弱い彼としては、一人で行動を起すのは、なにかと厄介で、困難がつきまとう。

しかし、訪ねて来たコペンハーゲンの病院で、左江は思ったよりも具合が悪く、啓介は遠慮して、ろくに話をしなかった。

とりあえず、彼は兵庫を訪ねて、なにか相談をしたかったのではなかったか。

あいにく、兵庫は旅行社へ出かけて、夕方からはエレナと食事に出かけていた。

それにしても、どうして、佐伯啓介は兵庫のオフィスへ来なかったのかと思う。

彼は、兵庫のつとめている旅行社を知っていた。

ホテルで兵庫が留守と知ったら、次にやってくるのは、コペンハーゲンの旅行社のオフィスではないだろうか。

だが、兵庫が調べた限りでは、ホテルのフロントも、オフィスのほうにも、佐伯啓介が兵庫を訪ねて来たという証言はない。

ホテルのフロントは、言葉が通じなくて、という場合が考えられた。しかし、コペンハーゲンの旅行社の窓口には、日本人の女性がいた。言葉が通じなくて、ということはない。

佐伯啓介は、病院を出て、工場の庭で刺殺されるまで、いったい、どこへ行っていたものなのか。

「兄さん、又、考えてる……」

茶碗に蕎麦湯を注ぎながら、真紀子がいった。

日本へ帰ってから、兄がなにを考え続けているのか、この妹はおおよそ、知っていた。兄から、佐伯啓介の死をきかされていたからである。

「兄さん、まさか、疑われてるんじゃないでしょうね」
青ざめて、心配した妹だが、その後、警察からなにもいって来ないことで、一応の安心をしているようである。

「いやなものだな。自分の知った人間が殺されるというのは……忘れたつもりでも、つい、考えてしまうんだよ」

苦笑して、兵庫は勘定を払った。

その近くの花屋で、墓へ供えるための小さな花束を二つ買った。

坂道を上って行くと、やがて、寺と墓地の続く高台に出る。

天気がよいせいか、墓参の人の姿は、どこの墓地にも、ちらほらみえた。

桜は、もう咲きはじめている梢もある。

その墓地のところで、兵庫は、ふと足をとめた。

見憶えのある墓地であった。

この前の墓参の時、兵庫はこのあたりで妹を待っていた。

古い、大きな墓のむこうに、いきなり榊原宗一郎の姿が立ち上って、兵庫を驚かせたものである。

あの時、宗一郎はしきりに墓石の文字をのぞいて、なにかを探していたようであった。
「ちょっと、待ってくれないか」

真紀子に声をかけて、兵庫は低い石垣を廻って、その墓地へ入って行った。

見当をつけておいたあたりの墓石を見廻した。

立派な墓石と、ごく普通の大きさの墓石とさまざまの墓が、各々の墓地に立っている。

自分の家の墓のまわりを贅沢に石垣で囲んでいるのがあるかと思うと、他との境界は植込みで区切つてあるのも、いい感じであった。

古い墓は、江戸時代からのものである。

兵庫は大きな松の木近くの墓に近づいた。

そこには自然石で出来た墓碑が建っていた。

ちょうど、あの折、榊原宗一郎が立ち上ったのが、このあたりの見当である。

兵庫は、その附近の墓を見廻した。

すぐ目についたのは、一基の地藏菩薩の像であった。

身の丈が五十センチばかりのお地藏様の石像が台座の上にのっている。

台座の正面には南無阿弥陀仏と刻んであった。後へ廻ってみると、なにやら、ぎっしり文字が彫つてある。

年月日であった。

最初が昭和二十一年十月二日、女、とあった。

次に、昭和二十七年三月二十五日、女、続いて、昭和三十年一月十六日、男、昭和三十年六月三日、男、昭和三十一年二月二日、女、というふうには、横にずらりと並んでいる。

その数は全部で十六名、最後が、昭和四十年十月三十日、女、で終っている。

「なにをみているのよ。兄さん」

いつの間にか墓地へ入って来ていたらしい真紀子が兵庫の背後から、のぞき込んだ。年月日と性別だけが、十六もきざまれている台座の文字であった。

「普通、お墓に彫るのは、なくなった人の命日だわね」

すぐ近くの墓石にしても、脇に昭和四十二年八月十二日、享年六十二歳、里子、と死んだ人の記録が刻まれている。

「こっちは、名なしだぞ」

仮に、彫られている年月日が命日とすると、その下に、男とか女とかだけしか書かれていないのが無気味であった。

「兄さん、これ、水子地蔵じゃないかしら」

ふと、真紀子がいい出した。

「水子……」

「産まなかった赤ちゃんよ。流産とか、病院で人工的に産まないようにしたとか……」

たしかに、そう考えると、名前のないのが合点が行く。

「しかし、一人の女性が十六人も流産するものかな。第一、一年に三回って年もあるじゃないか」

おまけに最初が昭和二十一年で、最後が昭和四十年であった。

「なんだか、変だよ」

最初の子供を二十歳で流産したとして、最後の子供は三十九歳の時の子ということになる。

「四十すぎても、子供を産む人はあるけれども……」

「一年に三回なんて、可笑しくないか」

「普通じゃないわね」

施主の名前はなかった。

「どうして、兄さん、こんなものを気にしたの」

「この前、ここでみかけたんだよ」

榊原宗一郎の名前をいうと、真紀子は目を丸くした。

「奥様は、まだ四十ちよつとでしょう」

榊原夫妻には子供はないが、

「昭和二十一年といえば、奥様がせいぜい、幼稚園ぐらいじゃないの」

「お寺できいてみようか」

「兄さんも好奇心が強いわね」

笑っていた真紀子だが、方丈の近くまで来ると、

「あたしが訊いてみる」

急に、ばたばたとかけ出して行った。

門のところまで待っていると、五分ばかりで戻って来た。

「行きましょう」